

海上自衛隊鹿屋基地内の防空壕について（第1報告）

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表
肥後考古学会 幹事 高谷 和生

1 第二十二海軍航空廠

(1) 旧鹿屋海軍航空基地と第22海軍航空廠

旧鹿屋海軍航空基地は、昭和11年4月開隊。戦前には真珠湾攻撃計画を練った第五航空艦隊司令部が設置され、戦時中は日本最大の特攻基地となり、総勢で908名もの特攻隊員を送り出した基地でもあった。

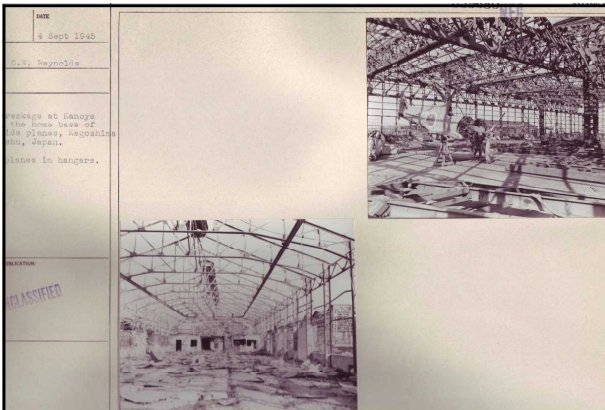
ここには基地に隣接して、昭和16年10月1日の海軍航空廠令に基づき第二十一海軍航空廠（大村）鹿屋支廠を置き、昭和19年4月1日には施設拡充に伴い「第二十二海軍航空廠」として発足した。

海軍工廠とは、艦船、航空機、各種兵器、弾薬などを開発・製造する海軍直営の軍需工場（工廠）のことである。ほかに海軍が直営する軍需工場としては、航空機の修理整備（末期には製造）を担当する航空本部所管の「空廠」が設置された。海軍航空廠では、海軍航空隊で用いられる軍用機の製造、部材の調達、保管、各種修理などを行っていた。

第22航空廠最盛期には15,000人の従業員を要し、零戦、天山、銀河等多数の海軍機部品各種を生産し、なかでも一式陸上攻撃機装備のロケット発射装置の作製、ロケット特攻機「桜花」機の生産、多数の海軍機の機体や発動機の修理を行っていた。

また、昭和19年11月には周辺区域への機械班・発動機班等の分散疎開が始まり、敗戦時には地下工場での生産も始まった。熊本県球磨郡錦町野間・迫・岩城周辺部には、出水分工場とともに本廠の人吉分工場が設置され、現在ここには機械工場、設営隊兵舎、自動車工場等の地下工場多数が残されている。基本文献・沿革・組織図等は、次回報告に譲る。

現在、本飛行場・航空廠は海上自衛隊鹿屋基地内となり、基地内には本報告防空壕の他、大型格納庫1基が残されており、史料館には空襲時銃撃の跡が残る工廠鉄柱も展示されている。



左写真：鹿屋航空廠と想定される空襲で破壊された建物群 米国公文書館（RG 80 Box 1282）福林徹氏提供

右写真：熊本県球磨郡錦町岩城地区に残された人吉分工場の機械工場壕。地元証言では飛行機翼の格納があった。

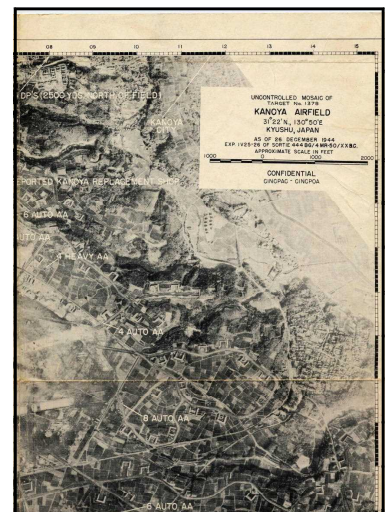
(2) 米軍資料による航空廠

ア 米軍資料『CINCPAC』における22航空廠施設

アメリカ太平洋軍は、合衆国軍が有する9つの統合軍のうちの一つで、統合軍の中でも最も古く設置され、ハワイ州・オアフ島に司令部を置く。ここでは太平洋戦争終結後、太平洋軍司令官がまとめた報告資料が「CINCPAC (Commander-in-Chief, Pacific Command)」である。

鹿屋航空基地の資料「KANOKA AIRFIELD」「TARGET 1378」は、1944年12月26日報告資料で、4枚綴りのものである。右写真に標題頁を掲載する。

また、資料2の上写真は、第22航空廠中心部と格納庫群、滑走路北側を撮影し、各施設機能・名称等を英文字で記載したもので、当該小型防空壕の位置を赤丸で示した。東西の大小建物間の広場内に小山状墳丘を有する状態が見てとれる。



飛行場東部域の施設状況

米軍『CINCPAC』1944年12月26日報告

米軍戦略航空軍F 1 3による鹿屋航空基地並びに第22航空廠、周辺地域の航空写真は、以下7回撮影されている。

3月10日に3PR5M75、3月25日に3PR5M100、月日3PR5M127、4月1日に3PR5M132、月日に3PR5M136、4月18日に3PR5M151、5月28日に3PR5M244の撮影である。

2 防空壕

松代大本営壕や旧軍施設での大型防空壕調査事例は、国内で数例あげられるが、軍工廠・航空廠での小型防空壕調査の報告事例は確認できていない。

現存する軍工廠防空壕事例では、入口は二箇所（複数）設け、弾片・崩壊物の飛散物・爆風などが直接侵入しないように防護堀を入口前面に設けたり、入口を屈曲させたりする特徴も有する。

また、入口には爆風や防毒避けに厚い板戸の設置を行ったり、流入した雨水や自然湧水を排水するための排水溝、汲み上げ用の溜升、天井部には壕内換気のための換気筒、室内照明等の設置も行われている。

(1) 第 2 1 海軍航空廠本部防空壕

本防空壕は、旧第二十一海軍航空廠本部隣接の長崎県大村市森園町に所在し、所管は国有地内、東西15m、南北10m規模の墳丘状マウンドを有し、入口は国により閉塞されている。

平成19年2月大村市教育委員会により市指定史跡として近現代戦争遺跡の保存が図られている。指定に先立ち、第二海軍航空廠慰霊塔奉賛会会長の神近義光氏により下図に示した手取り実測図が作製されている。

図面によると、A面側は屈曲した地下階段が、B面側には1 2段の直行した地下階段が設けられ、両入口は爆風壁が一体化した方形建屋形状を呈している。内部は南北6 m、東西4 mで、全高2 mを測るが、天井形状は不明である。換気筒は2基設置され、排水溝・溜升は図面には記されていないが、内部写真等の確認が出来ていないことから、詳細は未確認である。



左図：防空壕実測図

『第21海軍航空廠の記録』より

上写真：防空壕全景と史跡指定標柱

下写真：米軍空撮 2 1 航空廠

赤丸印が防空壕位置



(2) 第22海軍航空廠防空壕

現海上自衛隊鹿屋基地内に本防空壕は遺存している。外観は長楕円墳丘状マウンドを有し長軸約18m、南北10m規模で、入口二箇所は施錠され、基地広報班で管理されている。

A面側は屈曲した地下階段で10段・11段で降下し、B面側は直行した地下階段が設けられる。両入口には、上空からの被弾を避けるため覆屋を設けている。内部は長軸5m、短軸2mで、全高2.2mを測り、天井は平坦形状である。幅15cmの排水溝を内部に巡らし、片側に湧水等を汲み上げるための長方形溜升(20×70cm、深さ不明)、天井部には2基の換気筒が設置される。さらに特徴的な物として、床面から一段上げた状態でRC基礎土台(長2m×幅60cm・ボルト6本)が設けられている。

これは形状からして機械設置台座と考えられるが、本防空壕の施設用途が判明しないことから、現状での特定は困難である。





上左写真：防空壕A側入口の外観
上右写真：内部状況と機械設置台座
下左写真：排水溝と溜升
下右写真：B側入口に向けての直行する内部階段

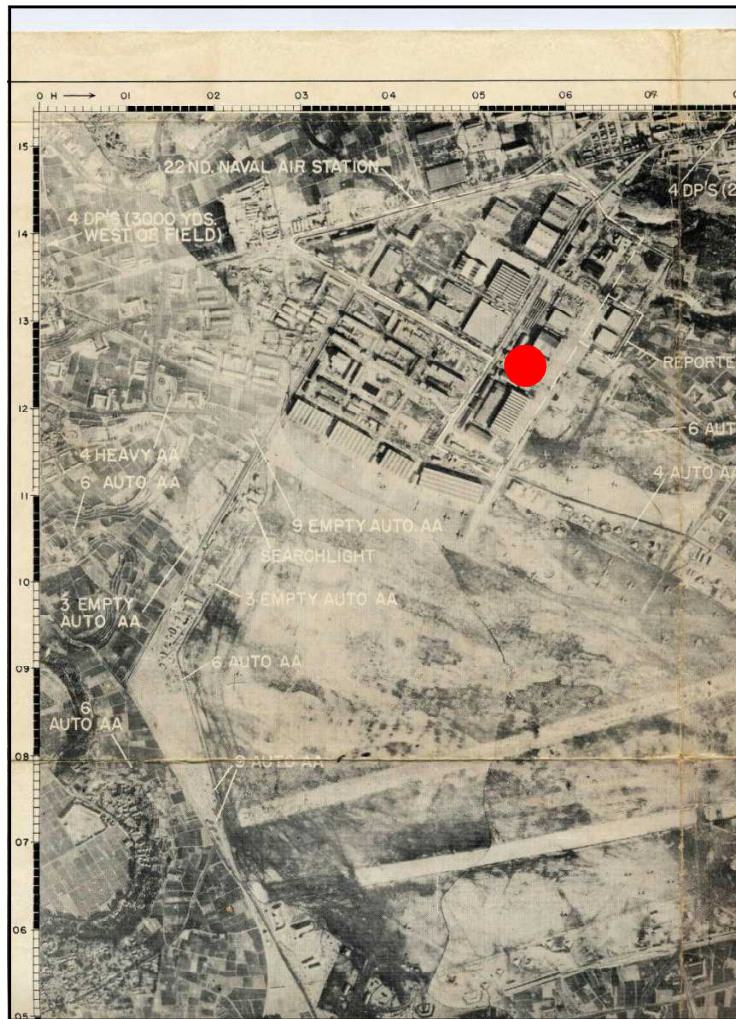
4 現状でのまとめと今後の課題

- 本施設は、周辺施設に関わる「機械・機器」を設置した重要度の高い「小型防空壕」である。
- 米軍資料『CINCPAC』報告になるように、本防空壕は「22ND. NAVAL AIR STATION」に位置している。証言等にあるように第二二海軍航空廠の施設である。
- 全国的には調査・報告事例が僅少で、対比資料としては長崎県大村市「第二一海軍航空廠本部防空壕」に類似資料を見ることができる。ただし資料の記録化、全国的集約がなされていない事から、詳細比較ができる段階までに至っていない。
- 基地内施設であり、海上自衛隊鹿屋基地と地元教育委員会文化財保護部局側で、実測図等の作成を行う必要がある。また当航空廠に関わる沿革、配置図等の調査を進め全容から防空壕機能の解明が必要である。



問い合わせ先・連絡先
くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表 高谷和生
自 宅／〒865-0061 熊本県玉名市立願寺126-5
個人携帯 090-1513-5528
Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
HP <http://www.kumamoto-senseki.net/>

[資料 1]



旧海軍鹿屋基地及び第二十二海軍航空廠関連米軍空撮資料
本資料は全て杉山弘一氏提供・所蔵資料である。

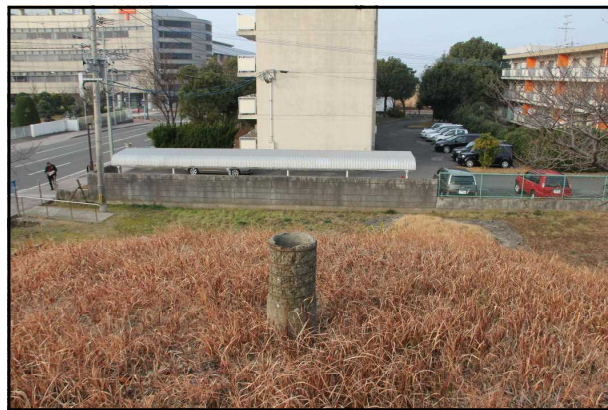
上：22航空廠施設中心部と格納庫群
米軍『CINCPAC』
1944年12月26日撮影

下：米軍空撮写真
米戦略航空軍5M75用務
1945年3月10日撮影

赤丸印が本防空壕



[資料 2]



第二十一海軍航空廠本部防空壕
長崎県大村市森園町
上左：A側入口とRC建屋
上右：上部の換気筒
中左：大村市指定の標柱
中右：B側入口と配電盤
下：防空壕全景

